

- 第2章 -

【 原因 】

「...俺が変わる一歩か。」

目線をまた水平線に戻す。
そう言って自分の頭で考え巡らせた。

俺は今まで同じだったのか...
高校時代に大好きだった彼女に振られてから、ずっとそのまま...
.....あんなに後悔したのに...
あんなに苦しくて辛かったのに...。

そんなんっ...
...また、同じだ...
俺はあの頃から何一つ進んでなかった...

ずっとずっと相手のせいにしてきた...

「そう。自分自身が今までの行いを、心から悪いとハッキリと思い直すところが改善の始まりなんだ。」

心から悪いと思う...ことが改善...？

「その自覚が出来なかったら、これから話すことの全てが意味なくなってしまうからね。」

話の意味か...

...うん。なるほど...

「...それはなんとなくわかる気がする。
俺も本当に悪いと思ってるからこそ、今は自分の改善点を全力で克服しようと思うんだ。」

あ…。

でもこれって…自分で悪いと認めた”今”だからこそわかった…のか？

俺は考え込むように視線を下に落とし、右手の人差し指の第一関節あたりを自分の顎に当てた。

自分で言った言葉に対して自分で疑問が出たのは初めてかもしれない。

俺は今まで悪いと思っていなかった。

だから…改善できることはなかった…？

「そう。その理解は君にとってかなりプラスなことだよ。」

「そして自分が悪いと自覚ができた君が、次に考えるべきことは”恋愛における4つの失恋項目”で自分がどれに当てはまるかだよ。

この項目で君が失恋の反省、改善の考えることが分かるはずだからね。」

「恋愛における失恋項目？

なんだそりゃ？」

「まあこれは僕が考えたオリジナルのものだから一般的になっていないものだけど、失恋の原因を大まかに4つに分けたものなんだ。

とにかくこれを見てみて。」

そう言ってカバンからA4の学習ノートを取り出して、そこに文字を描き始めた。

【恋愛における4つの失恋項目】

①相手の一方的な都合の場合

②自分の一方的な都合の場合

③お互いのすれ違いの場合

④もっと良い人を見つけた場合

「ふむ...なるほど。」

恋人と別れる原因みたいなものか。

一方的な都合...？

なるほど。すれ違いか...

もっといい人？

え、いやいやそれは浮気なんじゃ...？

と、ノートに書かれた言葉の意味を自分なりに考えていたところ、そいつは説明を始めた。

「じゃあ①から説明をするね。

まずこの”相手の一方的な都合”って言うのは、相手の理想の高さが原因だったり、そもそも相手に付き合う気がなかったり、こちら側ではもうどうしようもない場合のこと。」

「うーん？...なるほど？

でも理想が高かったり、相手が付き合う気がないってのはいまいちピンと来ないな。

ていうかその状態だったらそもそも付き合わないんじゃない...」

「確かに普通ならそう思うよね。

まあ一旦、全部項目の概要だけ説明をするから、その疑問には後で答えるね。」

「ああ、すまん。続けてくれ。」

「そして②の自分の一方的な都合の場合。

これも、相手か自分かで変わっただけで内容としては同じだね。

パターンとして書いてただけだからここは一緒のことだと思って。」

「うん。わかった。」

「次に③はお互いの気持ちだったり、考え方が付き合いはじめとズレてきている状態。価値観の相違だね。」

「なるほど...。」

相槌を打ちながら、説明をされたことに対して自分にも思い当たることがあることを思い出していた。

「最後に④は言葉の通り、今付き合っている人より魅力的な人を見つけてしまった場合。」

「これは…。振られる側からしたら結構しんどいなあ…。」

もしもこれが自分の原因だったら…
俺は引き攣った顔をしながら自分の頭をかく。

「ははっ。確かにそうだね。でもこれも振られる側にも問題があったりするんだ。」

ふふっと笑った顔も何か絵になっていて、何もかも完璧で整った顔。
くそ…。その顔ムカツくな…。

「これも？ どういうことだ？」

「うん。ちょうど良いからこの④から詳しい説明を始めるね。」

「ああ、そうしてくれ。」

「さっきも言った通り”相手は変えられない。自分しか変わらない。”これは大丈夫だよ
ね？」

「うん。大丈夫。それは十分理解できている…はずだ。」

何となく、わかってきた…。
そもそものこの世界は自分中心にしか動くことがないんだ。
相手側の気持ちとか考え方とか、感じ方、価値観なんかは本当の意味では理解できない。
完全に相手のことを理解することなんて不可能だ。
だから自分が合わせて変わっていくしかない…
なんとなくだけど、そんな気がするんだ。

「いいね。
じゃあそれを頭に置いておいて。
そしてより魅力的な人を見つけてしまうのには、大まかに分けて3つ原因がある。」

「ほお。3つの原因か。」

「まず1つ目は人間の本能的なもの。」

「本能？」

「ああ。これは人間のより良い子孫を残そうとする本能になるね。」

より良い子孫を残す...？

「うーん...いまいちピンとこないな。」

「極端な話、ものすごく性格が悪くて、顔もあまり可愛くない人と、性格がとても良くて顔も可愛い人とだったら、君はどちらを彼女にしたいと思う？」

「そりゃあ性格良くて可愛い子に決まってるだろ！

というか性格も悪くて顔も残念な方を選ぶ奴って、相当考え方ねじ曲がってるか、変な性癖を持ってる人しか選ばないだろ。」

「ああ。その通りだね。

人間はより良い子孫を残したいから、より良いと思う人を選ぶことを本能で行っているんだ。

だから男だったらイケメンとかお金持ちは必然的にモテる。

というか変な性癖って...どんな癖なんだろね(笑)」

ククッと笑って変なところにツッコミを入れてくる。

「いや、今そこに突っ込まなくて良いからっ！

俺は真剣に話しているのに！！」

全くコイツはっ...。

全然、緊張感の線がわからないな。

「いやいや、ごめんごめん(笑)ついね、あまりにも君が真剣な表情で変なことを言い出すから面白くてね。」

笑いながら話を続ける。

「変な性癖って...くくっ(笑)」

くっそ。こいつっ...。

何がツボに入ったのか全然理解できん。

「いや、そんな事は今はいいんだよ！それより早く続けてくれっ

さっきの話でより良い人を選ぶって本能なのか？

なんかしっくりこないような...

可愛くて性格もいい人を選ぶって当たり前すぎて、よくわからん。
と言うか可愛くない人でももし付き合っていたら、そのまま付き合うんじゃないか...？
別れてまで、そんな簡単にいい人にも乗り換えようと思えない気がするが...

「...うん。なるほどね。君が言いたいことはわかるよ。」

まだ顔は笑っているが声は真剣なトーンに落ち着いた。

「じゃあ、もしもね。
君が性格が悪くて顔もあまり可愛くない人と付き合っていたとして、つまり好みじゃない人だね。
で、その人と喧嘩をしたとします。」

「うん。」

「その時に偶然、性格がとても良くて顔も可愛らしい人と仲良くなるキッカケがあって、
良い雰囲気になってしまったらどうする？」

「どうするって...難しいな...。
まあ好みじゃないからって、一応今付き合っている人にはそんなことで別れを繰り返す
のは違うから...
いや、喧嘩してる最中なのか...。
.....んー...。
まあ性格も合わなかったら、もしかしたら心は動いちゃうかもな...。
.....いや、でもあくまでも喧嘩が原因だけ？
良い人を見つけたからって付き合ってる人と別れたいとまで思わないかな。」

「なるほどね。
でもじゃあ逆だったら？」

「逆？」

「そう。逆な場合。
今、付き合っている人が君と性格も合っていて顔も良い人。
でも喧嘩して、その時に会った人が性格悪くて顔もよくない人。
この場合はどう思う？」

「あ.....」

なるほど、逆か。

今付き合っている人が性格も合っていて可愛いのなら、この人とどうにか仲直りしたいと思うな。

仮にその性格悪くて顔もよくない人と出会うきっかけがあったとしても、その人は恋愛の対象には入らないし…。

「絶対に別れたくない。」

「でしょ。

性格が良くて顔が良い人とは喧嘩をしたとしても別れようとは思わない。

でも性格も顔も悪い人とは、何故か気持ちが揺らいでしまう。

それが人間の本能だよ。」

「…なるほど……。」

「より良い子孫を残そうとする本能があるから、人間は性格がいい人。顔がいい人を本能で勝手に選んでしまっているんだ。

まあ今回は顔って特定したけど、顔はある程度気にしない人もいるから大括りに言えば”より良い人”だね。」

「より良い人…」

「うん。

だから自分磨きの努力を怠ってはいけないんだよ。

相手に選んでもらう為にも、見放されない為にもね。」

「…そういうのって努力でどうにかできるのか…？」

例えば顔があまり良くないとかは…？」

「いやいや！！

当然出来るさ！」

「え…？」

「見た目なんて気持ちと努力でほとんど何とかなるんだよ？

見た目が悪いって諦めているから、一向に良くならないんだ。」

諦めているか…

「例えば太っているのなら、食事管理を徹底して痩せる努力をする。髪型に自信がないのなら美容室でプロに、自分の似合う髪型にしてもらう。顔にニキビやデキモノがあるなら、スキンケアをしっかりとる。こういう日頃の努力をしている人としていない人で雲泥の差が出ているんだよ？」

「日頃の努力ね...。」

「それに女性はそういうのは自分自身がすごく気を遣っているから、相手が気遣えているかはすぐに分かるんだよ。こういう努力ができているのは相手から見える印象がかなり変わってくるよ。」

「確かに...。」

自分が頑張っていると相手の頑張りもわかってくるもんな。

「それにもしも外見がどうしようもなかったとしても内面の心。つまり性格でどうにでもなるんだ。」

「うーん。性格ね...。」

「最近美女と野獣カップルがテレビや動画サイトで話題になっているけど、正直女性にとって顔は二の次になっている場合が多いんだ。僕ら男性と違ってね。」

顔が二の次...

確かに...すごく美人な芸能人の女性が冴えないお笑い芸人との結婚報道を最近多く見た。

「いくら芸能人並みにイケメンでも、性格が悪くて腹黒だったら絶対にモテない。本当に女性からモテる人は外見的なイケメンよりも、性格が優しくて、気遣いができて相手に想いやりを持っている内面イケメンなんだよ。」

「内面的なイケメンか...」

「うん。そしてこういう性格や内面は自分の気の持ちよう。つまり自分の努力でどうにでもなるってこと。」

「なるほど...。人間はより良い人を探して子孫を残そうとする本能があるからそれは努力がどれだけできているかが大切ってことか...。」

「その通り。ちゃんと理解できてる。いいね。」

...なんか...褒められた。
.....その上から目線がまたムカつく....
「うるせえよ。早く次に行ってくれ。」

「ああ。2つ目は自分勝手な理由が原因な場合。」

「自分勝手な理由...なんとなく、わかる気がする。」

「これは失恋の4項目の①と②にもかぶる部分があるんだけど、理想が元々高かったり、そもそも付き合うべきじゃないのに付き合ってしまう場合があるんだ。
だから付き合ってみてこんな人じゃないと思って、より自分の理想に近い人を求めてしまうということ。
まあ、もっと詳しくこの後の失恋の項目の方で説明するよ。」

「なるほど。わかった。」
理想か...。
付き合うべきじゃないのに付き合ってしまう理由...
すごく気になるな。

「最後の3つ目は諦め。
これは相手も自分しか変われず、相手を変えられないと気が付いているんだ。」

「相手を変えられないからこそその諦めってことか？」

「その通り。付き合ってから相手が墮落したり、
理想はそんなに高く持っていないはずなのに思っていた以上に価値観が合わなかったり、
考え方が合わなくなってしまう場合だね。
もしもそんなどうしようもない状況になってしまったら君はどうする？」

「そうだな...。」
相手を変える事はできない...。
じゃあ...
「自分が変わるしかない。」

「そうだね。まずは自分が変わるしかないと思う。
けどもう自分が変わることも限界がくる時だってあるんだ。
どちらも人間でそれぞれの考え方がある。
自分にだってどうしても変えられない部分だってある。」

そんな場合はどうするかい？」

「うーん…。なる…ほどな。」

自分の限界か…

自分でも最大限変わった。

でも、もう相手との考え方が合わない…

けど相手を変えることはできない。

…もう……どうしようもない…？

ん…？

ということはもう、付き合わない方が…いい…かも…？

「その人を……諦める…しかない？」

「うん。どんなに好きだとしても、そうなってしまったらもう相手を諦めるしかないよね。

僕もその選択を選ぶと思う。

そして、そんな状態の時に異性と出会いがあれば、必然的にそっちの人の方が良い
と思ったりするんだよ。」

「ああ…確かにな。」

もう考えが合わない人と一緒にいる方が辛い。

であれば新しい人を求めてしまう。か…

今まで振る相手側の考えを考えたことなんて、一度もなかったかもしれないな…

「だから逆に言えば、その考えを合わせられなかった相手が悪いとも言えるんだ。
もしお付き合いをした後に墮落してしまったなら、それが原因ということになるから
ね。」

「…なるほど。確かにな……それは納得だな…」

もっと良い人を見つけさせる状態にした側にも問題があるってことか。

……墮落か…。

確かあの時にも…

付き合ってから彼女を手に入れたような感じになってしまって、彼女のために何かを
頑張ることをしなくなった。

それで放っておいて振られた…なんてこともあったっけな。

それでも俺は振った彼女のことを酷く罵っていた記憶が…

…うう……今思うと、前の恋愛を思い出すたびに頭が痛くなるな…。

「ふふ。なにか思い当たったことがあったみたいだね。」

「うるせー。何もねーよ。」

何かコイツにおちょくられると反発したくなる。

そういえば、子供の頃からずっとコイツには負けたくないと思ってっただけな。

その喧嘩の度に一生懸命に何かを頑張っただけだな。

あの時は一緒の目線だったのに...

今じゃ...

「ここまでが4つの失恋項目の④番目”もっと良い人を見つけた”についてだよ。次に行ったら大丈夫かな？」

俺は自分が物思いにふけていたことに気がつきハッとして、意識を目の前のノートにまた戻した。

「ああ。大丈夫だ。」

「じゃあ次は①と②を一気にいくね。」

さっき君は理想が高かったり、相手が付き合う気がないという状態が分からないって言ってたよね？」

あ。自分の思いに集中しすぎて自分が持った疑問を忘れるところだった。

「そうそう！

ていうかその状態だったらそもそも付き合わないんじゃないか！？」

「うん。確かに一般的にはお付き合いって両思いから始まるものだと思っている人の方が多からね。」

「...どういうことだ？」

「それが違うんだよね。」

「！？」

「だって告白の時に両方が好きって気持ちになっている状態って、かなり難しいと思わないかい？」

「いや、だって告白を了承しているんだから好きに決まって…」

「付き合ってから相手のことがわかることって多いだろう？」

「え…。あ……」

「そもそも告白を了承しているから好きってことではないよ。相手に興味があるってだけでOKを出すってこともある。

これは好きって気持ちの前段階みたいなものかな。というか、むしろそっちの人の方が多い。

まあ、もちろん両思いで付き合い始める人もいるけどね。」

「好きの前段階？」

…好きって気持ちがないのに告白をOKする人の方が多いってどういうことだ？

「うん。告白する側は好きって気持ちが、抑えきれないくらい大きなものになっているから、その告白に了承してくれれば両思いだろうって勘違いが生まれるかもしれないけどね…」

「…」

うん…俺だ。

「告白された側はちょっとこの人いいなとか、この人のことをもっと知ってみたいって思ってイエスを言ってる場合もあるんだよ。

つまり告白する側よりもされる側の気持ちが薄いつてことだね。」

「うーん…。」

てっきりOKなんだから俺のことを好きなんだって安直に思っていた。

俺から告白することが多いから、告白される側の気持ちは知らなかったな…

「なぜならね、お互いに相手に興味があったとしても、付き合う前に相手の内面のことや価値観、考え方を知ることってかなり至難の技だからさ。」

「付き合う前に相手のことを知ることが出来ないってことか…？」

「そう。お付き合いをする前ってある程度仲が良くても、相手の内面のことをほとんど知ることができないんだ。」

「内面？」

「うん。この人はどういう食べ物が苦手で、どういう生活リズムで生活して、どんな夢を持っていて、何を考えているかとかね。」

「なるほど...確かに...。」

俺も告白する時でもそんなに相手を知れていないかも...

「というか相手のことを知ろうという感情って”人間の愛情”の中でもかなり後の方にくる段階だから、それが出来たら結構すごいけどね。」

「なるほど。付き合い始めとかは自分のことばかりになるってことか...」

「そうそう。で、君は知らない人のことを好きになれるかい？」

「いや、さすがの俺でも知らない人を好きになることはできないな。」

「うん。僕も出来ない。」

いや、うん。

多分誰もできないだろうな...

「だから告白の後。つまり付き合ってからがスタートで、そこから相手のことを知っていったり、自分のことを知ってもらったりと好きにさせる努力をする場合だってたくさんあるんだ。」

確かに、告白される側からしたら相手のことを知らない状態でもあって...

そんなに好きじゃなくても、その状態の時にどうするか返事を出さないといけないから

...

なるほど。だからちょっと興味があるくらいでも了承するのか...。

「そして相手を知らないけど恋人を作るこの中に、自分の見栄のためや寂しさを埋める為の時があるんだ。」

「見栄のためと寂しさ??」

「そうさ。」

クリスマスなのに彼女がいないことにコンプレックスがあって、その為だけに恋人を作ったり、周りの友達にみんな恋人が出来ていて自分も作らなきゃと焦っていたり。」

あー...なるほど。

聞いたことある。

「他には...大好きな人に振られて傷心だから、その寂しさを埋める為だったり。友達に茶化されてその勢いで付き合ってしまう人だったりだね。つまり自分中心に自分のためだけに付き合ってしまうということ。」

「自分中心...?」

「このタイプの人は付き合うということ自体が最終的な目標で、その恋人と関係が続けようと思っていないのさ。」

「付き合うことが目標?」

「そう。付き合った目的が”自分の為”だからね。自分のことしか考えていないから、いくらこちらが頑張っても振り向かせようとしてもその全てが無駄になってしまうんだ。そもそも付き合っていく気が無いんだからね。」

考え方がものすごくてちょっと引き気味になりながらもその話に耳を傾ける。

「な、なるほど、確かに...。」

そんな人、本当にいるのか...?

「あ.....」

自分の付き合った人の中に思い当たる一人が...

確か...俺が以前付き合った人もそんな感じで、付き合う前まではノリノリだったが、付き合った後俺が色々頑張ってお付き合いをさらに深くしていこうと思っても一向に振り向いてくれない子がいたな。

「ちなみに理想が高い人もそうだね。理想なんてものは相手に押し付けるものじゃない。相手を自分の理想通りに変えることなんてできなんだから。」

「...そうだな。相手は変えられない。自分しか変えられないから...か。」

さっき覚えたことをいま使ってみた。

顔には出ていないが、その変わらずの笑顔に何だかふふっと笑われたような気がしてちょっぴり恥ずかしかった。

「そうだね。だからこちら側ではもうどうしようもないんだ。

4つの失恋項目の、この①と②は一方的な都合だから、相手の立ち入る隙がないということだ。

つまり、もうどうしようもないという事は...」

「！　そうか。ここで諦めるしかなくなるってことだな。」

「うん。その通り。かなり理解できているみたいだね。」

恋愛における4つの失恋項目の内①、②、④は諦めるしかないということか...

「まあ...ただ、諦める前に努力は出来るけど、それで相手を振り向かせられるかは分からないし、相手がそもそも気がついてくれるかは分からないけどね。」

「相手次第ってことか...」

「そうだよ。じゃあ次だね。」

③のすれ違い。」

すれ違いか...

俺もこれは今まで付き合った人とはたくさんあった気がする。

「これはお互いの気持ち、考え方、価値観が付き合い当初からズレてきている状態のこと。」

「ああ。さっき言ってたよな。」

「うん。つまり付き合った時はこの人とは上手くいくと思っていたのに、相手の様々な面を知る事で、段々とズレていってしまったりすること。相手を知っていく上で自分との違いを理解したって事だね。」

俺が考えるように海辺を見つめた。

「自分と相手の違い...か.....」

俺の様子を確かめながら、改めてノートを指差して言った。

「それで君の今回の失恋は、今説明したこの4つの項目のどれに当てはまるかい？」

失恋の4項目の中でどれに俺が...

「ん？あれ...？今回のすれ違い項目の説明は随分と少ないんだな？」

「そうだね。ここは君にとってはもう説明の必要がないと思うからね。」

俺にとって...？

「さあ君はどれだろうね？」

うーん...

.....どうだろか...

...そういえば.....今回の、そもそもの振られた原因は何だったけかな...

うーん...

確か、最後...俺が浮気したってめっちゃ泣かれた気がする...

俺にはそんなつもりはなかったけど、複数の女の子と普通に仲良くしている事が気に食わなかったらしいと後で友人伝いに聞いた気がする。

原因は.....俺の浮気...？

...あ...

そう言えば、何かのタイミングで彼女が作ってくれたクッキー...

もらった時、俺の中で甘いものに変なこだわりがあって、かなりボロクソに酷評したこともあったな。

...せっかく作ってくれたのになあ.....

...その時、彼女はめっちゃ泣いていた気がする...

あ...あと、彼女に構って欲しくて、連絡が遅くなった彼女に対して、あえて連絡を取らなかったりして...

...向こうから寂しいと言わせるまで意地になったりして、でも結局すごく心配させたただけだったなあ...

あ...もしかして、あれもか.....

相手が仕事か何かの失敗で死ぬほど落ち込んでいた時、俺はその落ち込みモードがウザいやつとしか思えなくて、話を聞くだけ聞いて欲しいと言われてたのに、連絡を全無視して相手が大変な時に素っ気無くあしらってしまったんだった。

もし逆の立場だったら.....

...めちゃくちゃしんどい...

一緒に居る意味...ない.....

.....あと...

行為が終わったら、無言で...しかも即行でイヤホンを付けて寝ていた。

いや。なんだこれ...

今思えば...自分でも、本当ありえないくらい最低だ...

こう考えると.....結局俺は自分のことだけしか考えていなかったんだ...

...自分の気持ち優先で...自分が良ければ結局相手のことなんて...

あとは.....

...あとは.....。

もうあの頃を思い出す度に心がいたたまれなくなって、相手にどれだけ可哀想なことをし続けたのか...

...なんだか相手に申し訳なくなって...

それでも、こんな俺と一緒に居てくれたことが本当、あの子にただ感謝で...

なのに...俺はそんな相手のことを、酷いやつだと手当たり次第に友人に罵って回っていた...

...俺は

.....俺はっ...

「.....お、俺って、こんな.....こんなっ...最悪...だったのかよ.....」

気が付けば俺は顔を俯かせ自分の頭を抱えていた。

俺の...

自分の今までやってきた事は...自分でも気がつかないうちに相手を傷つけ、相手を踏み躪っていたんだ...

なんてっ...

なんて最低なことを.....

「...君も薄々気がついていいるかもしれないが、この③の失恋こそが改善をしなくてはいけない恋愛なんだ」

改善を.....しなくてはいけない恋愛.....？

「お互いに歩み寄ろうと思ったけど、すれ違ってしまった状態。」

...なんだ...？

...いったい...何のはなしをしている...？

「だからそのすれ違いを改善する事で、お付き合いする相手と上手くいく状態になれるってことさ。」

...改善.....する事で上手く...？

「つまり自分で一方的に別れようと思わないで失恋してしまった場合だよ。」

...いっ...ぽうてきに別れようと...思わないで.....？

「そう。今の君の状態だ。」

俺...？

...俺が...？

「君は相手から一方的に相手の都合で別れようと思われたり、君の君自身の都合で一方的に別れようと思ったり、お互いにもっと良い人を見つけて別れをしたわけじゃないだろう？」

「...そ...そう...だ...。」

...俺は彼女と別れたくてそんなことを.....したつもりはまったくないっ！

「...そうだよ。であれば、君はすれ違いをしてしまっただけなんだよ。

さっき君は言ったよね。最低だって。

そう。君は最低だ。」

...俺は.....最低....。

「だけどそうやって自分が最低なことに気がついて、相手のために涙を流せる最高の人間でもある。自信を持ちなよ。君はそこから最高に成長するんだ。」